

## インターネット上の言説の分析

### 偏見・差別研究を題材に

○高 史明（非会員）  
（神奈川大学人間科学部）

キーワード：インターネット、ソーシャル・メディア、計量テキスト分析

#### 【目的】

日本においては、インターネットは既に広く普及し、日常生活においてなくてはならないものになっている。そしてネットユーザーたちは、ネットを使用している間に、観測可能な足跡を様々な形で残す。

本研修の講師は、Twitter その他のオンラインメディアのデータを活用した研究の経験を有している。その経験をもとに、①利用可能なデータ資源の紹介、②分析事例の紹介、③倫理的な問題などについてお話ししたい。題材としては、これまで行ってきた在日コリアンや被差別部落出身者への偏見・差別研究を主に取り上げるが、そうした問題に関心のある方々だけでなく、様々な関心領域に応用可能なノウハウをお話する。

#### 【研修内容】

##### 1 利用可能なデータ資源

日常的なコミュニケーションと異なり、ネットを介したコミュニケーションでは多くの情報がデータとして自動的に記録される。近年では、こうして記録された膨大なデータ=ビッグデータを用いた研究やマーケティングも盛んになされるようになってきている。とはいっても、ユーザーのプライバシーや事業者の営業上の利益に関わるような情報は、守秘義務を伴う共同研究契約を結んだ場合などを除き利用することはできず、利用へのハードルは高い。

しかし中には、特別な制約なしに一般の研究者が利用可能なデータも存在している。例えば、一部の SNS 上の投稿やフォロー/フォロワー情報、掲示板やブログでの投稿、ある語句が Google で検索された回数やその語とともに検索された語の推移などである。

こうした、一般の研究者でも利用しやすいデータ資源とその利用しかたを紹介する。

##### 2 分析事例

上記のデータ資源を用いて行った分析事例を紹介する。

まず、Twitter 上の投稿データを用いて在日コリアンに関する言説の分析を行った研究を紹介する。ここでは、投稿の持つ自然言語データに対する計量テキスト分析、ユーザーごとの投稿回数の（偏った）分布などの分析を紹介する。

また、オンライン調査会社に委託して行った自己報告式の調査のデータと Twitter のデータを組み合わせて、炎上現象に参加したユーザーの特性やネットワーク構造を分析した共同研究（立命館大学小川祐樹氏、東京大学鳥海不二夫氏らとの共同研究）についても紹介する。

新たな研究を始める際の手がかりのつかみ方の解説は、被差別部落問題についての簡単な分析事例を用いて行う。特に Google Trends や Google 検索を用いて、社会における特定の問題への関心の強さがどう推移してきたか、またその変化のきっかけは何であったのかなどを知るためのノウハウをお話する。

さらに、こちらは一般の研究者が利用できるデータによるものではないが、株式会社サイバーエージェントが運営するインターネットテレビ、AbemaTV のコメントデータを用いて、差別的投稿をもたらす番組の要因とユーザーの要因を分離した研究事例（サイバーエージェント社高野雅典氏らとの

共同研究）も紹介する。

##### 3 倫理的問題

オンラインの情報は様々なメリットを研究者にもたらすが、それゆえに心理学者が用いる通常の研究手法（質問紙調査や実験室実験）では生じない種類の倫理的問題が生じる場合がある。倫理的配慮は、一般市民の利益を不当に害するのを避け、心理学者の専門家としての社会的地位を維持するために必要不可欠である。

そもそもどのような場合にオンラインのデータの利用が許容されるのかや、利用自体は可能であったとしても利用のしかたによって問題が生じるのはどのような場合なのかなどについて、具体的な事例（失敗事例も含む）も挙げつつ議論する。

（たか ふみあき）